
とある科学の雷光共鳴

だいふく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の雷光共鳴

【Nコード】

N6674Y

【作者名】

だいふく

【あらすじ】

隣の部屋から騒音が聞こえてくる。

「うるせえな……」

鳴神響輝は呟くが、止みそうにない。

仕方無いので部屋を出るとそこには片脚を押さえて悶えている隣人、上条当麻と純白のシスターがいた。

これは上条当麻の物語を原作のストーリーに沿って描かれる別視点

オリキャラ投稿について(前書き)

オリキャラ投稿についてです

オリキャラ投稿について

オリキャラ投稿についてです。

八話目現在では、

暗部メンバー三人

というところです。

投稿してくだされば本編に出すかは検討します。

投稿は感想でもメッセージでも構いません。

一人何回でも問題ないです。

キャラクターの容姿は「このアニメのこいつに似てる」とかではなく文章で投稿してください。

またオリキャラが必要になったらこのページは更新します。

他にも、「この辺こうしたらいんじゃないかね?」とか「いやいやここはこうだよ」みたいなことがありますたら指摘をお願いします。

1 - 1 《幻想殺しの少年の隣のお話》（前書き）

新作完成だあああああ！

1 - 1 《幻想殺しの少年の隣のお話》

七月二十日

隣の部屋から声が聞こえてくる。

どうやら隣人、上条当麻が朝から誰かと話しているようだ。やたらとアクションを交えてだが。

「うるせえな」

部屋の窓際に置いてある黄色のソファアの上に寝転んでいる青年が呟く。

青年の着ている黒い地にナナメに白いラインが入ったパーカーとどこにでもあるようなジーパンからうかがえる体格は世間一般で言えば痩せている方だ。少しつり目気味の眼は鷹のように鋭く、世間的に見てもイケメンと呼ばれる人種だろう。髪形は右目が隠れるくらいに長い少し癖のある質のいい黒髪をボサボサにしている。

青年はソファアに寝転んだまま大きく背伸びをして眼を閉じた。

総人口二三〇万人。東京西部の大部分を占める巨大な都市。人口の

八割が学生というところから『学園都市』と呼ばれている

学園都市に住む生徒達には、超能力を発現させるための特殊な授業が組まれており、その能力は、定期的な身体検査システムスキャンによって「無能力（レベル0）」から「超能力（レベル5）」までの六段階で評価されている。

青年
鳴神響輝なるかみ ひびきは玄関の外から聞こえてくる男女の声を覚ました。

会話は聞き取れないが男の方は隣人の上条のものだろう。女の方は聞いたことがない。

その声を聞きながら鳴神は少しボーツとする。

「……………コンビニでも行くか……」
鳴神はズボンのポケットに財布と携帯があるか確認して部屋を出た。

部屋の外に出ると、片脚を押さえて悶え苦しむ上条と純白の修道服を着た外国人の少女がいた。

（外国人なんて珍しいな……。しかも白の修道服か……）
鳴神は外国人をあまり見たことが無い人だ。

ちなみに学園都市には大きな教会はない。しかもこの第七学区までシスターが出てくるなんて事はないので、こんなしょぼくれた男子寮に来るとは思えない。

どちらにしろ鳴神と上条は隣人以上の関係ではないので厄介事には首を突っ込まないことにした。

そのまま二人の横を通り過ぎコンビニに向かう。

コンビニで昼に食べる鮭握り買い、家に帰る鳴神たが玄関のドアを開けた瞬間に眠気が襲ってきた為、先程まで寝ていたソファで寝てしまった。

今度は外から聞こえる爆音で目を覚ました。

部屋が異常に暑い　　いや、正確にはこの学生寮全域の気温が何かの影響により異常な数値を出しているのだ。

「くそ……」

呟くと鳴神は一瞬にして部屋から消えた。

彼の能力は『ライトニング雷光共鳴』

大能力（レベル4）で電撃使い（エレクトロマスター）に近い能力であるが少々異質な能力だ。

通常時の最大出力は6億ボルトだが雨天時の最大出力は学園都市第三位の最大出力10億ボルトを軽く超えるため計測不能となる。

他人の体内の電気信号をある程度乱すことができ、対象者を酷い立ち眩みにすることが可能であり、ある程度までなら磁力操作もすることができ万能な能力だ。

能力名の由来は、身体を電気に変換できるところからきており、自身を電気に変換することで電流と変わらない速度で移動が可能。その時通った場所は感電する。

この電気変換能力を静電気が多い場所で使用すると身体に大きな負担がかかるため電撃使いに弱い。

彼はこの能力を使い寮の隣の建物の屋上に一時避難した。

「それにしても…何で俺の寮から煙があがってんだ？」

彼が先程までいた寮からは煙があがっているのでどこかの部屋の住人が小火ホヤでも起こしたのだろうか。

しかし夏休み初日である今日は寮に居るのは鳴神くらいのもものだろう。

「つか、そんなところに居ないで出てこいよ」

唐突に彼が誰かに声を掛ける。

「やはり気付かれていましたか…」

壁の陰から出てきたのは女だった。

腰まで届く長い黒髪をポニーテールにまとめ、Tシャツに片足だけ大胆にカットしたジーンズという常識の範囲内で少しおかしな格好をしているが、それら全てを打ち消すような物が彼女の腰に下がっていた。

二メートルを超える日本刀。物好きな人は持っているだろうが、本来学園都市にそんなものがあることが異常だ。それをその女は持っている。

「お前、『中』の人間じゃねえな」
トントンと右の爪先で地面をノックする。

「ええ、『魔術師』ですから。」

「また変わったやつだな…。お前何者だ？」

『魔術師』

学園都市に存在する筈のない言葉。

それはオカルトの領域であり、存在する筈のない人間。

「私は『必要悪の教会』^{ネセサリウス}に所属する神裂火織と申します」

(ネセサリウス?)

鳴神は僅かに疑問を抱くが特には気にしない。

「お前、あの煙に関係してるな」彼は先程までいた学生寮をチラッと見る。

「あれはステイルの魔術ですね。私のものではありません」
神裂のポニーテールが風になびく。

「要するに仲間か。それよりお前」
不敵な笑みを浮かべる。

「強いな」

刹那、神裂を四方から六億ボルトの電撃が襲った。

「七閃」

鳴神が放った全ての電撃が神裂火織の斬撃によって打ち消された。

その斬撃はそのまま鳴神の頭上三センチ程のところを引き裂いた。
彼の髪の毛が宙を舞う。

「へえ」

その洗練された動きに思わず声を洩らしてしまう鳴神。

「これでも退きませんか…。七閃っ!」

まるで鎌鼬^{かまいたち}。七つの斬撃が屋上のコンクリートを削りとっていく。神裂は既に刀身を鞘に収めていた。しかしその動作があまりに速すぎて肉眼では刀を抜いたようには見えない。

まるで、巨大なレーザーが鳴神に襲いかかってくる。

しかし
当たらない。

「っ!？」

神裂が驚愕する。普通の人間ならそういう反応をするだろう。鳴神が消えたのだから。

しかし直後には神裂の後ろに立っている。

「なっ!」

神裂は気配に気付き、刀を抜かずに鞘ごと背後を切り払う。鞘がある状態であつても風を切る音が聞こえる程の勢い。

しかし居ない。

また消えた。

神裂から5メートル程の距離の場所に

パチツ、という音が聞こえ、鳴神が現れる。

「貴方は一体何者なんですか？」

斬撃を繰り出しながら神裂が質問してくる。

「俺は、ただの高校生だよ」

鳴神が質問に答えた瞬間、神裂を激しい目眩が襲う。鳴神が生体電

気を操作したためだ。

鳴神の額を神裂の放った斬撃が掠めた。

一筋の血が流れる。

「このまま戦えばどちらもただでは済まなさそうですね
」
刀で身体を支えるようにして立つ神裂。

「確かにな
」

鳴神の額から流れた血が頬をつたっていく。

「ここで体力を消耗するのは不味いですね…。一旦退くことにしま
しょう…」

そう言っつて神裂は屋上から去って行った。

一人残された鳴神は地面に大の字になって寝転ぶ。

「『魔術師』か
」

#1-1 《幻想殺しの少年の隣のお話》（後書き）

オリキャラが数人欲しいですはい。

- ・ 暗部組織のメンバー三人
- ・ 鳴神の友達二人
- ・ 魔術師二人

こんなところです。

物好きな方居れば投稿お願いします。

1 - 2 《魔術師は常識を知る》（前書き）

随時オリキャラ募集しております

1 - 2 〈魔術師は常識を知る〉

その後、鳴神響輝は自分の寮に戻ろうとしたのだが、先程戦った神裂火織という魔術師の仲間が起こした火事騒ぎのせいで物凄い数の野次馬が来ていたので帰ることが出来なかった。

「ったく」

鳴神は仕方無いのでいつも世話を焼いてくれる幼馴染みのところへ向かう。

とはいっても同じ高校に通っているのだから寮はすぐ近くだ。

ピンポン

鳴神は幼馴染みの部屋の玄関の前に立って、インターホンを鳴らす。

「はいはい」

出てきたのは幼馴染みである阿澄泉^{あすみずみ}。鳴神は見たことがないが常盤台中学の『超電磁砲^{レールガン}』が髪を黒く染めたみたいな感じの少女で、性格も明るく活発的だ。

そんな阿澄に鳴神は告げる。

「三日程泊めてくれ」

「……………」
「……………」

二人の間に沈黙。

勿論、皆様が想像したようなことは起きず四日が過ぎていた。
男女が二人きりで同じ部屋に寝泊まりしているのだが…。

現在、鳴神は夜の路上に一人で突っ立っているが、別に追い出された訳ではない。

『銭湯行かない？』

実は数十分前に阿澄から言われたこの一言が原因だった。

鳴神からすれば特に断る理由もないので行くことにしたのだが、超方向オンチである阿澄とはぐれてしまったのだ。

「……………」

もう諦めるしかない。

次にすべき事を鳴神が考えていると、純白のシスターが視界に入ってきた。

あの日、上条当麻の部屋の前にいたシスターだ。

鳴神が彼女を見かけたこと自体は常識の範囲内だった。

漆黒の修道服を身に纏った『魔術師（非常識）』が現れなければ。

突然、シスターの前に現れた白人の『魔術師』は二メートル近い身長だが、まだ幼い顔つきをしている。恐らく、そこで怯えているシスターと同じくらいの年齢だろう。

肩まである赤髪に、両手の十本の指には銀の指輪がならび、耳には幾つものピアス。口の端にある煙草の先からは煙がでており、右目の下にはバーコードのような刺青タトゥーが刻み込まれている。辺りの空気はまるで神裂と対峙した時のようだ。

「おかしいな、人払い（Opilia）の刻印ルーンは刻んでいるんだけど、もしかして発動前からここにいた？」
魔術師は笑みを浮かべながら呟く。

「知らねえ、つか常識を考えろよ……」
鳴神はうんざりしたように言葉を返す。

「僕達、魔術師は常識的な存在じゃ無いんだよ」
魔術師の顔からはまだ笑みが消えない。

「んで、非常識なお前の目的は？」

魔術師は懐からカードのようなものを出しながら告げる。
「ソレだよソレ」
魔術師が顎で指したものはシスター。鳴神も彼女を見る。

シスターが始めて口を開いた。

「あいつは私の中にある十万三千冊の魔道書が狙いなんだよ……」

鳴神は疑問を抱く。

「十万三千冊？」

その疑問には魔術師が答えた。

「その『禁書目録』は完全記憶能力を持っていてね。十万三千もの魔道書の原典が頭の中に入っているんだよ」

「へえ。ま、取り敢えず邪魔だし眠って貰うか」

そう言っつて鳴神はシスターに軽い電気を浴びせ、気絶させる。鳴神に身体を支えられ、ゆっくりと地面に寝かされる。

「んで、お前の名前は？」

「ステイル」マグヌス と名乗りたいところだけど、ここは Fortis931と言っつておこうかな」

神裂火織の話の中にも出てきた名前。

ステイル」マグヌスは口の端を歪め、煙草を揺らす。

「魔法名だよ、聞き慣れないだろう？ 僕達魔術師って生き物は、魔術を使う時には真名を名乗っつてはいけないらしくてね」
ステイル」マグヌスは説明をしながら鳴神に近付いてくる。
両者の距離が五メートルを切った。

「Fortis 日本語では強者と言っつたところだ。ま、語源はどうだっつていい。この名を名乗っつた事に意味があっつてね、僕達の間では、魔法名というよりは、むしろ」

「 殺し名っつてどこかな？」

魔術師は口の煙草を足下に投げ捨てた。

火のついた煙草はステイルの足に踏まれて消えてしまう。

「炎よ（Kenaz）」
ステイルが言葉を口にした瞬間、彼が手に持っていたカードのよう
なものが燃え上がった。

炎はそこを起点にして、ステイルの手から真っ直ぐに伸びる。

「巨人に（Purisaz）苦痛の（Naupiz）贈り物を（G
ebo）」

伸びた炎は剣の形となり、鳴神に振り下ろされた。

炎剣は触れた瞬間にカタチが失われ、アスファルトを粉々にする。
超高温の黒煙と爆音が辺りを支配していく。

魔術師は笑みを消さずに背後に言葉を投げかける。

「今の、どうやって避けたんだい？」

「教える必要があるか？」

鳴神はステイルの質問には答えずに、ジーンズのポケットに右手を
突っ込む。

ステイルが新たな炎剣を生み出し振り向く。

直後、彼の視界から鳴神が消えた。

「チイ！」

ステイルは舌打ちをして辺りを見回す。しかし周りには誰一人居な
い。

「バチイ！」

そんなことをしているうちに彼の身体に強い衝撃が走る。

「ぐあつ！」

ステイルの身体が高圧電流を流し込まれた時のように感電する。

片膝をアスファルトの地面につくステイルの三メートル程前に鳴神が現れる。

「さっきの答えだ。俺は身体を電気に変換することが出来るんだよ」

「それは素敵な能力だね……」

ステイルは、高圧電流にボロボロにされた身体で立ち上がり、鳴神から一歩遠ざかる。

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ」
ステイルが先程とは異なる詠唱を始めた。

彼の顔からはいつの間にか笑みが消え、無表情になっている。
まるで淡々と仕事をこなす殺し屋のように。

「それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり。
それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり。

その名は炎、その役は剣。

顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ

ッ！」

ステイルの修道服のボタンが内側からの力により弾け飛んだ。

そこから出てきたのは巨大な炎の塊。

ただの炎の塊ではなく、燃え盛る炎の中に、重油のような黒くドロドロしたものが『芯』になっている。それは人間のカタチをしている。

ステイルがその名を告げる。

『魔女狩りの王』インケンティウス。

その意味は『必ず殺す』。

炎の巨神は鳴神に少し近づいてくる。

まるで、全身が燃え盛り悲鳴をあげ苦しむ人間が、にじり寄ってきているような。

「チッ！」

舌打ちをして、右手を『魔女狩りの王』に向ける鳴神。

その指先から六億ボルトの電撃が放たれ、炎の巨神に直撃する。

バチィ！

その電撃の衝撃で『魔女狩りの王』は飛沫となり辺りに散らばった。

しかし、その飛沫の隙間から見えたステイルは最後の切り札を潰された筈なのに笑っている。

ビュルン！

四方八方から粘性の液体が鳴神の目の前の一ヶ所に集まる。

「ッ！」

驚いた鳴神は一步後ろへ下がった。

一ヶ所に集まった重油のような黒い液体は再び人間のカタチを作り上げる。

あのまま同じ場所に居ればあの中に取り込まれていただろう。

(再生能力か…)

ソレはカタチを変え、まるで両手に剣を持っているようなカタチになった。

いや、剣というよりはイエス・キリストが磔にされたような、二メートルを軽く越える巨大な十字架だ。

ソレは両手の十字架を振り上げ、鳴神に襲いかかる。

しかし当たらない。

炎の十字架はアスファルトを焼いただけだ。3000の炎により地面が溶ける。

鳴神は『魔女狩りの王』から十メートル程の距離のところに現れた。そして呟く。

「常識を教えてやるよ、魔術師」

1 - 2 《魔術師は常識を知る》（後書き）

どうだったでしょうか？

僕にもだんだん文章力がついてきて、皆さんが楽しめる作品を書けたらな、と思っております。

感想、アイデア、合作者、オリキャラ募集しております

1 - 3 へ戦いが終われば休息を (前書き)

テスト前だが更新

1 - 3 へ戦いが終われば休息を

「常識を教えてやるよ、魔術師」

鳴神響輝はそう呟いた。

彼のいる位置から十メートルほど前には燃え盛る炎の巨神『魔女狩りの王』イノケンティウス。

その後ろには魔術師、ステイル＝マグヌスがいる。

ステイルの口が動いた。

「殺れ『魔女狩りの王』」

その言葉に呼応するかのように、こちらへ跳んでくる『魔女狩りの王』。その速度はまるで弾丸のようだ。

しかし鳴神がまた消えた。

そしてステイルの真横に現れる。

「チィ！小賢しい真似をするな！」

ステイルが炎剣を生み出し鳴神を横に斬り払った。

しかし炎剣は何にも当たらず空振りする。

鳴神は、今度はステイルの目の前に現れた。

ステイルは有無を言わず炎剣を縦に降り下ろす。

しかし、炎剣はアスファルトに叩き付けられ爆発を起こす。アスファルトの破片が辺りに飛び散るだけだ。

「クソッ！『魔女狩りの王』！！」

ステイルは炎の巨神を五メートル程先にいる鳴神に目掛けて突進させる。

『魔女狩りの王』と鳴神の距離はすぐに縮まった。

十字架を両手に持つ炎の怪物はソレを鳴神に向かって降り下ろす

筈だった。

鳴神の目の前にいる筈の『魔女狩りの王』は黒い粘性の液体になって辺りに散らばっていた。ソレがピクピクと蟲のように蠢いているのが吐き気を催す。

しかしもとのカタチには戻らない。

「『魔女狩りの王』！？なぜ再生しない！？」

その現象に狼狽えるステイル。

鳴神が口を開いた。

「お前の魔術に使ってる、この辺りにあった紙、全部燃やしたんだよ」

ステイルはその顔に驚愕の表情を浮かべる。

「な…何故『魔女狩りの王』の正体がルーンだとわかった！？それより今の状況でどうやって燃やしたんだ！？」

自分の常識では理解出来ないことを鳴神に聞いてくる。

「電磁波でサーチしたら大量の紙切れがあった。魔術に使っているとしか思えない。燃やしたのは常識的に考えれば電撃だろう」

紙を燃やすのに電撃を使用するのは別に常識ではないが、鳴神は説明をしていく。

「なっ、まさかそんなことが……。くそっ、炎よ（Kenaz）」
懐からカードを取り出し詠唱を始めるステイル。しかし詠唱は途中で途切れる。

「バチィ！！」

ステイルの頭上から六億ボルトの電撃が降ってきたからだ。

「ぐあああああああ　　！！！」

彼の身体には超高压電流が走り、意識を狩り取っていく。

「くそ　　」

炎の魔術師は最後に鳴神をギロリ、と睨み付け、その場に倒れ込んだ。

鳴神はそれを見て、ステイルの意識が無くなったと判断した。

「お前じゃ俺には勝てねえよ。常識だ」

彼はそう告げた後、ステイルに背を向け歩き始めた

後日、鳴神は帰宅していた。

簡単に説明すると、鳴神はあのあと阿澄を見付け銭湯には行かず彼女の部屋に連れて帰り、スタイルと戦っている間に完璧に修理されていた自分の寮に帰ったのだった。

そういえば隣の部屋の上条はここ三日は帰ってきていないそうだ。多分、あの『禁書目録』と呼ばれていた純白シスターに関係しているのだろう。

そんなことを考えながら自宅のソファで横になっている鳴神である。

ケータイの着メロが鳴る。

阿澄からの電話のようだった。

鳴神は心底面倒臭そうにソファから身体を起こし、ケータイに手を伸ばした。

「なんだ、泉……」

『あ、いや……ね、昨日は結局、銭湯に行けなかったから』

「お前が迷子になったからなんだが……」

的確に原因のみを説明してあげる鳴神。

『うっ……。それは置いといてよ！プールよプール！プールに行こうって言ってるのよ！』

鳴神はうんざりしたように「また迷子になるだろ」

『ならないわよ！！』

阿澄が大声を張り上げたせいで耳が痛い…。

「行ったらいいんだろ…。んでいつ誰と行くんだ？」

『私に決まってるでしょうがあああああ！！！』

流石に通話を切った。

ピロリン

デフォのままにしてあるメール受信音が鳴る。

案の定、阿澄からのメールだった

集合場所なんかをまとめたもののようなのだ。

集合場所は第六学区の『竜宮ランド』という最近出来た、プールとか遊園地とかの複合施設らしい。

メンバーは勿論二人。何を考えているんだか。時間は明日の午後1時とのことだ。

「仕方ねえ…。」

鳴神はそう呟いたあと、眠りについた

七月二六日である。

鳴神は『竜宮ランド』の前に来ていた。

現在、一時二十分。

鳴神は集合時間の十分前には来ていたのでかれこれ三十分は待たされてる。

『竜宮ランド』は最近出来たということもあつてか、かなりの人が集まっている。

その人ごみの中に阿澄がいるのを見付けてしまった。

向こうも気付いたらしく手を振って走ってくる。

そんなことをする阿澄は誰かの足に躓いて、鳴神の目の前で転けた。当たり前だが、鳴神に関してラブコメのようなハプニングが起こるはずもなく、彼は自分に向かって転倒してきた阿澄を避ける。

「ふにゃあ！」

なぜか猫みたいな声を出しながら地面に向かって盛大にダイブした阿澄。

「……………」

鳴神はそれを凄く冷たい目で見る。

起き上がった阿澄が言った。

「じゃ、行こっか」

周りにいる人はみんな水着姿。
勿論、鳴神と阿澄も水着である。
鳴神は青色の地にイルカのイラストが描かれている、どこにでもあ
るような水着だ。

阿澄は黄緑色の横縞ビキニで所々にフリルがあしらってある結構派
手な水着だ。

意外に胸のある阿澄だが、ビキニを装着したことによって谷間がモ
ノスゴイことになっていたりする。

しかし鳴神はそんなこと気にしない。

「じゃ、俺は寝とくから」

そう言つて、ベンチへ向かう。

「えええええ！？来てすぐ寝るの！？少しぐらい遊ぼうよ！」
急いで引き止める阿澄。

「いや、俺が水に入るとみんな感電するんだが……」
鳴神の能力は『雷光共鳴』である。彼は無意識のうちに微弱な電流
を身体から放っているため、水に入ったりすると周りの人はみんな
感電してしまうのだ。

「あつ……………」

そんな事実気付いて絶句する幼馴染み。

「……………」

「……………」

二人の間に沈黙の時間が訪れる。

ちなみに夏の間は遊園地のエリアは閉鎖されている。
つまり、二人はやることがない訳だ。

「どうしよっか……………」

「知らん、寝る」

そう言ってベンチへ向かう。

その行動に阿澄は

「もう止めません……………」
諦めた。

その言葉の直後、女の子の悲鳴が聞こえた。
辺りの人の視線が一ヶ所に集まる。

その中心では三人組の男が中学生くらい少女を人質にとっている。
その中の一人は拳銃を持っているようだ。

「オイ！こいつを助けたけりゃ売上金全部持ってこい！」
「どうやらこの『竜宮ランド』の売上金を目的とした強盗のようだ。」

「ちよ、響輝！どうしよう！」
焦る阿澄だが、鳴神としても困ったものである。

「まったく、常識をわかってねえなあ……」
鳴神が動いた。

犯人の方に向かって走って行く。
すぐに彼は身体を電気に変換して三人組に襲いかかる。

「ぐあつ！」「うがつ！」

うち二人は感電したようでその場に倒れる。
だが拳銃を持ったあと一人は倒れない。どうやら何かの能力を使っ
たようだ。

「電気が…、効かねえなあ！」

「何の能力だ？」

身体を元に戻した鳴神が聞く。

「俺の能力は『蓄電放出』バッテリーデイスチャージ、電気を蓄えて放出する強能力（レベル
3）だぜえ」

強能力とはいえ、鳴神にとっては天敵といえる能力だろう。

人質にとられていた少女は二人が倒れたことで解放されているが、
恐怖で身体を震わせている。

「常識を教えてやる、犯罪者」
直後、『蓄電放出』の周りに砂鉄が舞い上がった。

「なっ、お前電撃使いじゃないのか!？」

「常盤台の『超電磁砲』は磁力も操作出来るんだぜ？」

大量の砂鉄が『蓄電放出』を襲う。

「お前は一体」

『蓄電放出』は黒い竜巻に呑み込まれながら最後に聞く。

髪を掻き上げながら鳴神は呟く。

「ただの高校生だ……」

その言葉を合図に黒い竜巻は段々小さくなり最後には消えてしまった。

「あの……」

先程まで人質にとられていた少女が鳴神に声をかけてきた。

「気にすんな」

彼はそれを適当にあしらひ阿澄に声をかける。

「疲れたし、帰るぞ」

そのまま更衣室へ向かっていく鳴神。

「ちょっと待ってよ」

それを追いかける阿澄。

「……………」

少女は二人の後ろ姿をずっと見つめていた

1 - 3 へ戦いが終われば休息を (後書き)

今回は若干の日常パートでした。

いかがでしたでしょうか？

次回は予告編みたいなので、その次から三沢塾編です。

勿論、原作は死守します。

ちなみに暗部メンバーの募集は次回までです。

他はまだまだですよ！

#1-4へこの道は次へと続く(前書き)

シリアスシーンって苦手です

1 - 4 《この道は次へと続く》

七月二七日

現在、午後十一時五十分。

そんな時間帯に鳴神はインターホンの音で目が覚めた。

(常識を考えろよ…)

そんなことを考えながらソファから身体を起こして玄関へ向かう。

「非常識だな…」

そついいながら開けたドアの先に

真っ黒のスーツに身を包んだ男が立っていた。

「貴方が『雷光共鳴』で間違いないですか？」

見知らぬ男は鳴神に丁寧な口調で話し掛けてくる。

「ああ、そうだが…。何者だ？」

「学園都市統括理事長、アレイスター・クロウリーの使いの者です」

鳴神は多少は驚いたようだが、表情を崩すことはなかった。

「んで、学園都市トップの犬が何の用だ？」

男は意外そうな顔をして

「自覚していらっしやらないんですか？」

「ああ」

意味がわからない鳴神は取り敢えずそう答える。

男は

「まあいいでしょう、本題に入ります。統括理事長が貴方と会いたがつていらつしやるのですが、貴方には無理矢理にでも着いてきて貰わなければなりません」

鳴神の口元に微かに笑みが浮かぶ。

「無理矢理じゃなくても行つてやるよ、理事長のところには」

「有難うございます。こちらは無駄な手順を踏まずに済みました」

軽くお辞儀をする男。

「それでは、統括理事長のいる第七学区へ送らせていただきます」

そう言つて男は寮の前に停めてあつた黒いワンボックスカーに鳴神を乗せる。

男の合図でワンボックスカーが緩やかに走り始めた

第七学区の窓のなくドアもなく階段もない異様なビルの中

そこに鳴神はいた。

その真正面には培養液に満たされた生命維持装置らしき機械の中に『人間』が浮かんでいる。

『人間』以外に表現しようのない生物。

銀色の髪を持つ『人間』は男にも女にも見え、大人にも子供にも見えて、聖人にも囚人にも見える。

学園都市統括理事長、アレイスター・クロウリー。

「理事長が俺に何の用だ？」

鳴神は得体の知れない『人間』アレイスターに向かって話し掛ける。傍目から見れば謎の機械と話している人ととられてもおかしくはない。

「大した事ではない。君が私の『プラン』に誤差を与える可能性があるるので監視する」

アレイスターは培養液の中で返事を返す。

「監視だと？」

アレイスターはその方法を告げる。

「暗部だ」

「っ！どういうことだ…？」

流石に普段はクールな鳴神も少し動揺した。

「君は私の『プラン』に影響を及ぼす。つまり、それを逆手に取って『プラン』の進行を補助するために、この学園都市の暗部組織に入って貰うだけだ」

『プラン』が何なのかは鳴神にはわからないが、とてつもなくヤバイものということだけは分かった。

しかし鳴神は返事を返す。

至ってクールに。

「なってやるよ暗部に。」

ただし

彼はアレイスターを指差し

「常識を教えてやるよ、アレイスター」
「クロウリー」
いつもの台詞で、宣言した。

1 - 4 《この道は次へと続く》（後書き）

どうでしたでしょうか？

遂に響輝と暗部が交差します！

次回から三沢塾編ですが、ちゃんと戦いますよ！

これでオリキャラ、暗部メンバーの募集は終了です。

#2・1《この街の闇は明るい闇》(前書き)

やっと出来た

#2-1 《この街の闇は明るい闇》

七月二八日

午前0時四十分

先程、光の柱が空に向かって放たれた学園都市。
その街の誰もいない裏路地を鳴神響輝は歩いている。
アレイスターのいた窓のないビルからの帰りだ。

日付が変わってすぐなだけあって街灯すらないこの裏路地辺りは真
っ暗だ。

そんな道を歩く鳴神の前に誰かが現れた。

現れたのは鳴神の知り合い。

「アレイスターくんに会った？響輝くん」
声を掛けてきたのは永松大王。ながまつおおきみ

切れ長な琥珀色の瞳で、顔立ちはやや童顔。前髪が短く、もみあげ
の長い特徴的な黒髪をしている。

鳴神の友人であるが、同時に『情報屋』をしている。鳴神とは中学
校からの付き合いで、仲も良い方だ。

「流石『情報屋』だな…」

鳴神は少し驚いたような顔をする。

すると永松は笑みを見せた。

「ボクが興味を持っているだけだよ。『面白いこと』にね」

鳴神は肩をすくませて、

「非常識な友達を持つと大変だな」

「確かに」

二人は微かな笑みを交わし、真逆の方向へ歩いて行く

鳴神が居なくなつたあと、琥珀色の眼を妖しく光らせて永松大王は
呟く。

「やっぱり面白いよ、学園都市は…」

八月一日

現在、鳴神は事前に電話で指定されていた、とある高級マンション
の一室に來ている。

どこにでもあるような、最低限の家具のみが置かれている小綺麗な

部屋だ。

そこには異様な三人の先客がいた。

ソファーに腰掛けている一人は般若の面を着けた不思議な男。

床に置いてある座布団に正座で座り込み、テレビでニュースを観ている一人は眼鏡を掛けた銀髪の女。

椅子に腰を下ろし紅茶を飲んでいる一人は真っ赤な長髪の女。

彼らは暗部組織『リバーズ』

アレイスター「クロウリーのプランを補助するただけに集められた集団」。

鳴神はそのメンバーとなり、今日初めて彼らと顔を合わせたのだ。

「お前がアレイスターの言っていた新入りか？」

般若の面を着けた男が鳴神に声を掛けてきた。

「ああ」

鳴神は最低限の返事を返す。

「俺は岩見祥吾だ。知らないことはないだろう？」

鳴神は思い出したように呟く。

「六年前の連続殺人犯……」

岩見祥吾、という名前を聞いて鳴神が辿り着いたのはその言葉。

「その通りだ。今となつては何人殺したか覚えてないがな」
少し笑いを交えながら話す岩見は鳴神のイメージとは全く違った人物のようだ。

しかし眼には殺意が宿っているように感じられる。

岩見との話が終わると、いつの間にか鳴神の横にいた眼鏡を掛けた銀髪の女が話し掛けてきた。

「初めまして。星宮天音ほしみや あまねと申します」

星宮天音

そう名乗った女は少し悪い顔色をしている。貧

血か何かだろう。

彼女は華奢な体つきであるが服の上からでもかなり胸が大きいとわかる。

「鳴神響輝だ、宜しく」

一応、鳴神も挨拶を返す。

「能力の説明をしておきますね。私の能力は『ウェザーコントロール天候操作』といって、天候を自在に操れる能力です。多分、貴方とは相性が良いでしょうね」

星宮は表情を全く崩さず説明を終えた。

確かに鳴神の能力である『雷光共鳴』は天候に大きく左右される能力だ。雨天時には常盤台の『超電磁砲』をも超える出力の電撃を放つ事が出来る。

天候を操れるとなれば軽く第三位に勝つことが出来るだろう。

「ああ、そつだな」

「私からは以上です」

星宮との会話も一通り終えた鳴神に、次は紅茶を飲んでいた赤髪の女が声を掛けてきた。

「ねえ、鳴神君ってかなり格好良いよね！モテるんじゃない？」
鳴神の前で初めて口にした言葉がこれだった。

天真爛漫というか思ったことがそのまま口に出てると言った方が適切かもしれない。

（非常識だなこいつ…）
鳴神も、ついそう思ってしまう。

「ねえねえ、どうなのどうなの？」
椅子から身を乗り出して聞いてくる女。

「名前は？」
取り敢えず名前だけでも聞いておこうと考えた鳴神は名前を訊ねる。

「へ？」
返事がこれだ。

鳴神の額に血管が浮かび上がった気がする。きっと気のせいだ。
鳴神はもう一度言った。

「お前の名前だ…」

「ああ、あたしの名前？あたしは夏野なつの夕日ゆうひ！ヨロシクね！」

鳴神が嫌いなのはこういつたテンションだ。

「鳴神だ、宜しく」

一応自己紹介をしておく鳴神。

「ちなみにあたしの能力は『精神操作』サイココントロールっていつて、目があった人を操れるの！」

簡単に言ってしまうえば洗脳能力だろうか。

「知ってると思うが、『雷光共鳴』だ」

「格好良いー！なにそののうり 痛ったい！」

誰かが台詞を途中まで言いかけた夏野の頭を小突いた。いつの間にか般若の面を外していた岩見だ。

左目の辺りに火傷の痕があるが、顔はかなり整っておりイケメンと称しても問題ないレベルだ。

「こいつの言うことは基本流せよ？」

暗部としての先輩だからなのか、夏野の扱い方を鳴神に教える岩見。

「俺を殺したいのか？」

先程感じられた殺意はいまだに消えていない。

「まあな。だけど女の子がいる前じゃ殺さないし、殺すと後が面倒だろ？」

岩見は笑って答える。

殺人犯の言うことは常人には理解できないだろう。

「確かに」

しかし鳴神は理解する。常人ではないために。

そこに星宮が声を掛けてきた。

「岩見さん。『リバース』の説明をしても良いですか？」

「ん、勿論」

星宮の方に顔を向けて岩見が頷く。

「有難う御座います。では鳴神さん、『リバース』の説明をしますね」

改まった口調で話始める星宮。鳴神はこういった人間は嫌いではない。

「頼む」

鳴神が最低限の言葉で返事をする。

「『リバース』とは学園都市統括理事長アレイスター・クロウリーの『プラン』の補助や軌道修正等を行う組織です」

また『プラン』

『プラン』とは一体何なのか、未だに鳴神には分からない。

星宮は説明を続ける。

「メンバーは私、星宮天音、岩見さん、夏野さん、そして鳴神さんの四人です」

「ああ」

先程の自己紹介でそれはわかっている。

「ちなみに『リバーズ』のメンバーは基本的に単独行動だ」
これは岩見の言葉。

「お話はそれぐらいじゃないかな？」

今度は夏野が言った台詞だ。

「そうですね、他にはありません」

星宮が締めくくろうとしたそのとき、とつぜん鳴神が手を小さく上げた。

「俺からもお前らに言っとくことが」

夏野と岩見がキョトンとした顔をする。

「どつぞ、鳴神さん」

鳴神は面倒臭そうに右手で後頭部を掻く。

この状況で彼が言うことは一つしかないだろう。常識を尊重する彼なら。

「お前らに」

鳴神は小さく呼吸を挟む。

「常識を教えてやるよ、『リバーズ』」

この日、鳴神響輝は暗部組織『リバーズ』に宣戦布告をした

#2-1 《この街の闇は明るい闇》（後書き）

オリキャラ顔出し回です。

性格指定のなかったキャラは適当に性格を作りました。

いかがだったでしょうか？

次回からようやく三沢塾編突入！

だいふく

#2-2 《平穩はなかなか訪れない》（前書き）

短いですが更新です。

お待たせしてすみませんでした！

#2-2〈平穩はなかなか訪れない〉

八月八日である。

鳴神響輝は三沢塾という進学予備校の建物の前にいた。

三沢塾とは全国シェア一位を誇る進学予備校である。

予備校とはその名の通り大学に入るために勉強をするための学校だが、学園都市での『進学予備校』の定義はそれにさらにもうひと捻り加えたもので、本当は大学に受かるだけの実力があるのにわざと浪人して更に上のレベルの大学に挑戦する人のための学校だったりする。

なぜ鳴神がこんなところにいるか、その理由を知るためには二時間ほど前に遡る。

『ちよっとちよっと、出るのが遅いじゃないか!』

ケータイから聞こえてきたのは女の声だった。

『リバーズ』のメンバーと会う為に集まった八月一日。その日付と場所を伝えてきたのもこの女の声だった。

「うるせえ。で…なんだ?」

うんざりしたように右手で持っていたケータイを肩と頬で固定して、空いた右手はズボンのポケットに突っ込んだ。

『ちよつとちよつと、面倒臭がらない!』

その音が聞こえたのか少し焦ったような声で注意をしてくる。

「だからなんだよ……」

女は少し勿体をつけて

『実は理事長からの依頼なんだけど

』

その依頼というのが、『三沢塾の内部に侵入し、とある人物と勝敗を着けずに戦え』というものだったのだ。

『とある人物』が誰かは分からないが、鳴神は依頼をこなすためにここに居る。

ちなみに『現在、三沢塾は科学崇拝を軸においた新興宗教と化している』と電話の女が話していた。

三沢塾は異様な雰囲気を漂わせていた。

まるで世界中でそこにだけ四角く穴が開いたような奇妙な感覚。

鳴神はその奇妙な建物の正面ロビーに足を踏み入れた

中は特に異常もない。

鳴神自身が受験生に見えるのだろう、彼が周りから浮くことはなかった。

鳴神は三沢塾の内部を電磁波で異常がないか確かめる。

(隠し部屋が二十近くあるな)

電磁波で探知したところスペースがあるのに出入口のない部屋が十四、五部屋見つかった。恐らく他にもいくつがあるのだろう。

鳴神はゆっくりと『電気』の速度で移動した』

音の速さでの移動が音速、光の速さでの移動が光速ならば、彼の『雷光共鳴』は雷の速さでの『雷速』移動とでも言うべきか。

(おかしい……)

鳴神が姿を現したのは階段の手前だった。塾生や教師と思われる何人かの人が階段を登り降りしている。

別にそれ自体は不思議でもなんでもない。

異常なのは『鳴神が突然視界に現れたのに誰も眉ひとつ動かさないこと』だ。

そういう状況を見馴れているのなら別だ。

しかし鳴神の能力は学園都市でも唯一、『力』自体になれる能力だろう。

そんな能力を見馴れている筈がない。

それが『非常識』だ。

この場にいる誰もが鳴神についての話をせず、目を合わせようともしない。まるで彼に意識を向ける必要もないという感じた。

「さて…と、隠し部屋を探すか…」

その空気を不自然に感じながらも自分のすべきことを口に出す。

刹那、階段辺りにいた生徒や教師全員が『消えた』

自分からどこかに行った、などではなく鳴神の視界から消えたのだ。まるで、彼の『雷光共鳴』をこの場にいた全員が使ったかのように。

「な…」

余りの出来事に絶句する鳴神。

コッソ コッソ

鳴神以外は誰もいない筈の階段に足音が響く。

鳴神が足音のする方を向くと男がいた。

二メートルに届く細身の身体を包んでいるのは見るだけで高価と分かる純白のスーツ。

髪は緑色。奇妙な色合いに染め上げられオールバックに整えられたその髪だけが、肌も服も白い男を一段と目立たせている。

「何者だ？」

異様な空気の中で先に口を開いたのは鳴神。

恐らくアレイスターの依頼の『とある人物』だろう。

「当然、我が名はアウレオルス・イザード。ただの錬金術師に過ぎん」

『とある人物』 アウレオルス・イザードは自身を『錬金術師』と言った。

この間戦ったのは魔術師だったが、次は錬金術師。鳴神には違いはわからないが恐らく似たようなものだろう。

「で、そんなただの錬金術師が俺に何の用だ？」

鳴神は多少の挑発のニュアンスも混ぜてアウレオルスに聞く。

アウレオルスは表情を変えないまま返事を返す。

「失笑、己がしたことすら分からんとは」

「は？」

意味がわからない。

鳴神はただアレイスターに言われてこのビルに侵入しただけだ。

しかしそんな鳴神を無視してアウレオルスが動いた。

蛇が這い出るような動きで純白のスーツの右袖から出てきたのは黄金の刃物。

（金で作られた鏃…？）

鳴神は眉をひそめる。

確かに鏃の形をしてはいるが、大きさは鏃にしては大きすぎる小ぶりのナイフ程の大きさ。

（投げる為の物か？）

鳴神がそう決めつけかけた瞬間、

「リメン」
「
アウレオルスの右手が持ち上がると同時に黄金の鍍の切っ先が鳴神に向く。

「マグナー！」
直後、鍍が弾丸のように真っ直ぐに鳴神の脳天に向かって飛んできた。

「なっ!?!」
鳴神は飛んできた鍍を身体を捻って避けた。

鍍の尻には黄金の鎖がついていた。
鎖は何もない空中を真っ直ぐ伸び続ける。
鍍が階段の手すりに当たった。

ぱん、と手すりが水風船を割るような音をたて液体となって弾け飛んだ。
液体は金色に輝いている。まるで
いや、まさしく、高熱により溶解した純金だった。

その様子を驚愕の眼差しで見つめる鳴神。
とっさに身を捻って避けることが出来たから良かったものの、当たっていれば自分も純金になっていただろう。

「自然、何を驚いている？」 鍍はアウレオルスのスーツの袖に舞い戻っていく。

「我が役は錬金の師。それが何を意味するか、当然分かんとは言わせんよ」

鳴神は絶句する。

彼も魔術師を二人見てきた。超能力者だってこの街にはいる。

だが驚かすにはいられない。
ただのモノを純金に変換する瞬間を見たことなど一度もないのだから。

だがアウレオルス・イザードは実現した。

「我が『瞬間錬金^{リメンマクナ}』は僅かでも傷をつけたモノを即座に純金へと強制変換する。当然、防御など無意味、逃避も不可能。そら、貴様も得物を出せ」

アウレオルスが余裕綽々（よゆうしゃくしゃく）といった感じで鳴神に説明をする。

「
」
鳴神が何かを呟いた。

アウレオルスには聞き取れない程度の声で。

鳴神は心底楽しそうな笑みをアウレオルスに向ける。

「愕然、この場面で笑みをこぼすとは」

アウレオルスは鳴神のその表情を見て、驚きを隠せない。

闘いは嫌いではない。だからこそ笑顔になる。

今度はアウレオルスに聞こえるように辺りに響く声で叫ぶ。

「いいぜ、常識を教えてやるよ、錬金術師　　！！」

#2-2《平穩はなかなか訪れない》（後書き）

やっと緑頭ことアウレオルス・イザードの登場です。

知ってる人は知ってますよね、いま鳴神と戦ってるのはなにか。

それにしても短い　　！

ふざけてんのか僕は！

とかまあ言ってみました。

時間があれば投稿して頂いたオリキャラと鳴神を戦わせるだけのコーナーを作ってみようと思います。

ではまた次回　　。

正直、ヒロインとかまだ決めてない。
だいふく

#2・3へ金もいつかはその輝きを失う(前書き)

更新。

誤字脱字の指摘お願いします。

2 - 3 《金もいつかはその輝きを失う》

「いいぜ、常識を教えてやるよ、錬金術師　　！！」

鳴神は叫んだ。

戦いの狂気の中に身を置くことに喜びを感じているような笑いを顔中に浮かべながら。

鳴神は続ける。

「今度はこっちから行かせてもらう　　！！」
その言葉がアウレオルスの耳に入ると同時に彼の視界から鳴神が消えた。

「　　ッ！」

アウレオルスが黄金の鎖を鳴神が消えた場所に飛ばす　　が、
電気に身体を変換した鳴神には当たらない。

「その鎖、モノしか金に変換しないんだろ？」
声がしたのはアウレオルスの背後。

しまった　　と、彼が思った時には既に身体を電流が駆け抜けていた。

「が　　はっ！」

アウレオルスの息が　　それ以前に心音が止まる。

鳴神の手は、アウレオルスの背中の中左側　　丁度、心臓がある辺りに置かれている。

彼は天気が晴れの場合、6億ボルト、1000アンペアを軽く超え

る電流を発生させる事が出来る。

人間は50アンペア以上の電流を受けると心臓が停止し死に至る。

つまり、鳴神は人間が死ぬ20倍以上もの電流をアウレオルスに流し込んだのだ。

当然、そんなことをされて生きているはずがない。

ドサツ、という音とともにアウレオルスは膝から崩れ落ちた。

「意外に簡単だったな」

鳴神は後頭部を右手で掻き上げながら呟いた。

その時、鳴神の視界の端に何かが映る。

「儼然、つまらんな少年」

突然の声。

声の主は『アウレオルスニイザード』だった。

ただし、鳴神の目の前で倒れているアウレオルスではない。

いつの間にか鳴神の視界に入っていたのだ。もう一人のアウレオルスニイザードが。

「ッ!?」

余りの驚愕に脳が上手く働かない。

なぜ自分の目の前に、殺した筈の相手が立っているのだ? と

という疑問にすら思考が行き届かない。

「自然、殺した人間が目の前に現れれば驚愕しない者は居ないだろう」

アウレオルスは話し出す。

そして、有り得ない事実を告げる。

「当然、それは『偽物』だ」

その台詞を聞いて、やっと鳴神の脳が働き始めた。

「どうということだ？」

クローン技術等を使えば確かに全く同じ人間を作り出すことは出来る。

しかし、アウレオルスは『錬金術師』だ。学園都市の外から来た人間にクローンなど作り出せる筈がない。

「『黄金錬成（アルスニマグナ）』。錬金術師の到達点であり

威圧感。

その言葉の一つ一つに偽物にはなかった威圧感がある。

「己が思考したモノが現実を歪曲させ、支配する」

己が思考したモノ　　頭で考えた事を

現実を歪曲させる　　現実に行きわたることが出来る。

『世界の全て』を支配する魔術、『黄金錬成』。

そんなモノに鳴神程度の能力者が勝てるとは誰も思わない。

逆に言えば 『勝たなくていい』

学園都市統括理事長アレイスターニクローリーからは『勝敗を着けずに戦え』と言われている。

つまり、この戦いに勝利は必要ない。

鳴神は直ぐに行動した。

掌をアウレオルスの方に向け、六億ボルトの蒼白い雷撃を飛ばす。

アウレオルスは微塵も驚かずスーツの懐から髪の毛程に細い鍼を取り出し、首筋に刺した。

しかしアウレオルスは痛そうな表情さえも見せず、抜き取った鍼を投げ捨てた。

「『雷撃は消え去れ』」

アウレオルスの呟きが鳴神の耳に入った瞬間、『六億ボルトの雷撃が消え去った』。

「なっ！」

『現実を歪められた』

鳴神の飛ばした雷撃が、アウレオルスの言葉によって消し去られた。

それこそが『黄金錬成』の能力^{チカラ}
世界の全てを支配する能力^{チカラ}

「チー！」

鳴神は舌打ちして姿勢を低くして走り始める。

アウレオルスとの距離は五メートルほどしかないためすぐに縮まった。

鳴神は握り締めた拳に電撃を纏わせ、アウレオルスの顔面に向かって勢いよく叩き付ける。

「『その拳は届かない』」

だが、拳は錬金術師には当たらない。
何故か当たる直前で止まってしまう。

「クソッ！」

バックステップでアウレオルスから距離をとる鳴神。

もしかするとアウレオルスは鳴神で遊んでいるのかもしれない。
恐らく、その気になれば『黄金錬成』を使って鳴神の存在自体を消し去る事が出来るだろう。

「つまらんな、『少年』」

アウレオルスが鳴神との戦いに飽きた。

次に来る台詞からは鳴神を殺す気で来るだろう。

「窒息せよ」

その言葉がアウレオルスの口から発された瞬間に、鳴神の呼吸が苦

しくなった。

「うあ」

息が出来ない。

まるで、己の首に鋼鉄のワイヤーを巻き付けたような苦痛に苦しむ。鳴神はとっさに演算を組み上げ電気に身体を変換し、すぐに元に戻す。

その行動をとったためか、とたんに苦しみから解放された鳴神。

アウレオルスは『鳴神響輝という人間の現実を歪めた』のだ。ならば、その認識をずらしてやればいい。

『鳴神響輝』が窒息するなら『電気』になればいいし、『電気』が消されるなら『鳴神響輝』になればいい。

「な……我が黄金の錬成を打ち破っただど？」

錬金術師は眼を見開く。

「面白い。少年に確定した窒息を現実を歪曲させることで回避するとは」

鳴神は首を右手で押さえてアウレオルスを睨み付け、

「お前が『世界を支配する』ことが、俺が『お前に負ける』ことにはならねえ」

言った。

「ふん。戯れ言だ」

だがアウレオルスは一蹴。

しかし鳴神は笑っている。

アウレオルスニダミーと戦った時もそうだった。

自分が不利になればなる程、いつものクールな鳴神から離れていく。

鳴神のその笑みは心の底から愉しそうだ。

戦いの狂気の中に身を置く彼は戦闘狂になるのかもしれない。

眩く。

鳴神が。

常識を尊重する非常識人が。

「常識ってやつを刻み込んでやるよ、錬金術師」

#2・3《金もいつかはその輝きを失う》（後書き）

ダミーの登場時間みじかいww

まあ気にしたら負けです。

さて、次回がアウレオルスとの戦いの本番ですが、どうしよう全く考えてない。

とにかく、今週中には！

#2・4へ揺るがぬ理想と現実 (前書き)

page page

2 - 4 へ揺るがぬ理想と現実

「失笑、貴様では私に勝つことは出来んよ」

アウレオルスはそう言った。

確かに、『世界の支配（アルスニマグナ）』に学園都市という井の中の蛙（かきくわ）が勝てる筈がない。

だから鳴神は勝たない。

わざわざ必死になって勝つ必要なんてない。

アレイスターからは勝敗を着けるなど言われているし、鳴神自身も戦いを楽しめたらそれでいい。

ただそれだけ。

ただそれだけの為に鳴神はアウレオルスと対峙している。

アウレオルスが動いた。

スーツの懐から鍼を出し、自らの首筋に刺す。

その行動と同時に鳴神も地面を蹴り、アウレオルスに向かって駆け出す。

バックステップで稼いだ距離プラスアルファなので大した距離ではない。

鳴神の拳が届いた　　と思つた瞬間、

「『少年は五十メートル後退する』」

直後、鳴神の目の前にいた筈のアウレオルスニイザードが鳴神から一気に遠ざかった。

鳴神の眼にはアウレオルスが豆粒のように見える程に遠ざかった。

「チッ！」

舌打ちをしてすぐに身体を電気に変換してアウレオルスに向かつていく。

しかし、錬金術師は焦る様子すら見せずに細い鍼を首筋へ突き立てる。

「『回数は三度まで、範囲は半径三メートル内、電気を拒絶する』」

アウレオルスが首筋から鍼を抜き取り横合いへ投げ捨てた瞬間、電氣と化していた鳴神の身体が止まった。

なにもない筈の虚空に眼には見えない『壁』が出来ている。だが、その『壁』は電氣のみを遮断する。

しかし、『電氣』で駄目なら『鳴神響輝』になればいい。

すぐさま身体を元に戻した鳴神は拳を握り締め、大きく一步を踏み込む。

「　　ッ！」

さすがのアウレオルスもこの距離からは回避も出来ず、『黄金錬成』を唱える時間もない。

「オオオオオオ！！！」

バキィ、という暴力的かつ原始的な音がアウレオルスの頬から聞こえてきた。

鳴神は、自らの腕を通じて人を殴った時に感じる独特の衝撃が来るのを感じた。

鳴神の拳がアウレオルスの顔面にめり込んでいる。

鳴神自身にあまり力が無いせいかアウレオルスは期待した程には吹き飛ばず、一瞬だけ宙を舞ったかと思うと地面に激突して二、三度転じた。

鳴神はその間に体勢を立て直している。

「な」

立ち上がり啞然とする錬金術師。

しかし、これは現実だ。

たった今起きた現実での出来事だ。

「ふん。『我が身の傷は癒える』」

またもアウレオルスはスーツの懐から鍼を取り出し首筋に刺す。

すると、鳴神の拳がめり込んだ痕があるアウレオルスの頬から一瞬にしてその痕が消えた。

これが『黄金錬成』

あらゆる現実を歪ませてしまう魔術。

「な……」

鳴神は思わず口から声を洩らしてしまう。

当たり前なことだがいくらダメージを与えたところで回復されれば

全くの無意味。

続いてもう一本の鉞を取り出し首筋へ刺すアウレオルス。

「『少年、凍死せよ』」

直後に鳴神を氷点下50の寒さが襲った。

「あ がっ!？」

鳴神の身体が、少しずつではあるが凍り始めている。

即座に演算をし、身体を電気に変換しアウレオルスに向かっていくが、届かない。

先程の『三度』という制限がまだ残っているのだ。

しかし、『凍死』という現実の歪みは『鳴神響輝』が世界からいなくなったことにより意味を無くした。

その思考を電気のまま一秒もかからずに済ませた鳴神は身体を元に戻しアウレオルスの顎を目掛けて拳を振り上げる。

しかし鳴神のその行動の直前に、錬金術師は鉞を取り出し首筋に刺していた。

「『この拳は届かない』」

先程と全く同じ台詞だ。

つまり、鳴神の『拳』はアウレオルスには届かない。

しかし、逆に言ってしまうば『拳』以外ならアウレオルスの顔面には届く。

案の定、鳴神の拳はアウレオルスには当たらなかった。届かなかった。のではなく、当たらなかった。

当たり前だ、鳴神は『わざと』外したのだから。

もちろん当たりもしない拳の勢いが落ちることもなくアウレオルスの顔のすぐ右横を通過した。

バキツ アウレオルスの頬に強い衝撃が走った。

「 は？」

錬金術師は一瞬何が起きたか理解が出来ない。しかし、衝撃は別の箇所からも伝わってくる。

腹部から、その次は足下にも。

たった今、鳴神が行ったことは単純明快だ。

鳴神の最初の一撃である『拳』はアウレオルスには届かないので、その一撃を外したと思わせて『肘』をぶつけることでダメージを与える。そうすればアウレオルスは黄金錬成を使うことも出来ず、鳴神の攻めを一方向的に受け続けるだけだ。

しかし鳴神の方も攻撃の手を休めるわけにはいかないので、筋肉があまりついていない手足を力一杯振るう。

錬金術師に思考する時間を与えてしまえば黄金錬成を使われ回復されてしまう。

つまり鳴神の体力が尽きれば鳴神の負け、アウレオルスがそれまでに気絶でもすれば鳴神の勝ちだ。

しかし、勝つてはいけないし、負けてもいけない。

それがアレイスターからの依頼だからだ。

『しかし、どうやって引き分ける？』

そんな疑問がアウレオルスに対する攻撃の手を緩めない鳴神の頭に浮かぶ。

学園都市の高位能力者である彼の頭脳をフル回転させてもその解は出ない。

(どうしたらいい？)

鳴神がさらに深く考えようとしたとき、

『そこまでだ、鳴神響輝』

鳴神の思考を誰かの声が中断させた。

「チィ、アレイスターか？」

学園都市統括理事長アレイスターニクロウリー

鳴神がこの三沢塾に侵入し、錬金術師アウレオルスニイザードと戦うことになったのも全て彼のプランを効率よく進行させるため。

いつの間にかアウレオルスへの追撃を止めていた鳴神だが、アウレオルスにこの声が聞こえている様子はない。どうやら何かの能力を利用して鳴神の脳内に直接干渉してるようだ。

『それ以上すると私のプランに支障が出る。錬金術師が戦闘不能になってしまえばそのあとにある戦闘が行えないからな』

アレイスターの言っていることを単純に言つと、戦いを終わらせて三沢塾から脱出しろ、ということだ。

「わかった、今から戻る」

鳴神はそれに納得したようで、地面に倒れ込んで黄金錬成を唱えよ

うとしていたアウレオルスの腹に右足で蹴りを入れて返事をする。
「つか報酬は？」

『安心しろ、報酬は後日口座に振り込んでおく』
鳴神からしてみればどうでもいいことだが金はあるに越したことはない。

「了解了解」
鳴神はそんな台詞をこの場に残しアウレオルスから一歩遠ざかったかと思うと、一瞬にして消えた。

その様子を地面に転がったままの錬金術師はただ見ているしかなかった

後日、八月九日だ。

鳴神は昨日の三沢塾でのその後の出来事をアレイスターの部下から聞いていた。

どうやら鳴神が帰った後に三沢塾に入って来たのは、隣の部屋に住む上条当麻と、鳴神が七月二四日に戦った魔術師ステイルニマグヌスらしい。

ステイルがなぜアウレオルスと戦ったかはわかるにしても何故上条なのか。そんな疑問が鳴神の頭を掠める。しかし、そんなこと今はわかるはずがない。ならばこれから知っていけばいいだけの話。

昨日の出来事は鳴神響輝という青年が暗部組織『リバーズ』のメンバーになって初めての仕事だった。

それだけではアレイスターのプランは成功はしない。これからも鳴神の影響力が必要になる場面があるだろう。

つまり、鳴神がアレイスターのプランを潰すチャンスはそれだけあるということだ。

しかし鳴神はそんなことはしない。やりたいことはただ一つ。

アレイスターニクロウリーのプランが自身の生活をどう変えるかを見定めること。

もしそれで阿澄や他の友人が傷つくようなら全力で阻止する、ただそれだけのこと。

たとえそれが、学園都市だけでなく世界を敵に回すことになったとしても

#2・4へ揺るがぬ理想と現実（後書き）

最後無理矢理しめたんでそのうち書き直します。

さて、三沢塾編終了コールとともに次回予告。

次回は、日常シーンを挟もうと思います。

鳴神たちの日常を描くと同時にオリキャラ出しもしようと思いますのでどうぞよろしく。

次はオリジナルストーリーを書き上げてヒロインを出さなきゃ

だいふく

行間へ平行線の主人公のような (前書き)

短い行間

行間〈平行線の主人公のような〉

八月十日

PM01:03

とある路地裏にて

俺の周りにいた仲間の最後の一人が悲鳴を上げて倒れた。名前は確か橋本だった気がする。

地面に倒れている俺の仲間は皆、泡を吹いて痙攣している。

何なんだ一体……。

そいつの周りからは、バチバチツツという音が響き、高圧電流のような青白い光が迸っている。今のこの様子だけを見ていると電撃使い（エレクトロマスター）の高位能力者に思えてくるが、その程度なら俺達にもまだ勝ち目はあった。

しかし、そいつはその程度の能力者ではなかったのだろう。

こちらが攻撃を仕掛けると、まるで空間移動のように「消えた」のだ。そしてそいつが消えているうちに仲間が次々と倒れていった。

今は目の前にいるそいつは、少しずつ、少しずつだがこちらに近づいてきている。

長い前髪で右目を隠すそいつは、まるで悪魔だ。

そつえば何で俺はこんな目にあってるんだ？

確かスキルアウトの仲間たちとカツアゲをしていて、それで路地裏にこいつを連れ込んだんだ。俺のチームには俺を含めて強能力者（レベル3）が三人いるし、今日は十五人の仲間が集まっていた。それだけいれば能力者も含めて、大抵のやつには勝つことができる。

しかし勝てなかった。
そいつの能力は強すぎた。
こんな能力を持つ超能力者（レベル5）なんか聞いたことがないの
で、恐らく大能力者（レベル4）だ。大能力者にも色々いるが、こ
いつは超能力者と錯覚してしまう程の能力　　大能力者の最上
位クラスの能力だろう。使い方によっては超能力者にすら勝ってし
まうかもしれない程だ。

俺の能力は屈折光線リフレクトフラッシュという、光の進行方向を曲げることの出来る能
力だ。応用すれば相手の視覚情報と対象物の位置をずらすことが出
来たり、空気をスクリーンにして虚像や実像を作り出すことが出来
るのだが、そんな小細工を仕掛けたところで勝ち目はない。

無理だ　　無理に決まってる。
俺がそう思った直後には、意識が刈り取られていた。

八月十日

PM02:56

とある路地裏にて

今日は物騒だ……

鳴神がそう思うのも仕方がない。これでカツアゲされるのが今日だ
けで三度目だからだ。

もちろん、全員返り討ちにあわせたがそれにしても三回。隣人がよく使っている言葉を拝借すれば『不幸だ……』と言いたい気分の鳴神だが、取り敢えず三度目のカツアゲ集団を凹ませるのが先だ。

幸い、今回も連れ込まれた先が薄暗い路地裏だったのでフルに能力を使う事が出来る。

しかし、六億ボルトもの電撃を浴びせてしまうと流石に死んでしまっただろう。

普通に『電流』になって逃げてしまうのも一つの手だが、もう二度と絡まれたくない鳴神は『お仕置き』をすることにした。

目の前に居るのは三人。電磁波を使い確認したところ背後には二人いるようだ。

すぐさま、合計五人いるスキルアウトの生体電気を乱し、激しい目眩を誘発させる。そしてスキルアウト達が身動きを取れないところに、だいぶ力を抑えた電撃を撃ち込む。

流石に動けない標的への攻撃を外す筈もなく五発しか撃たなかった電撃は、全てスキルアウト達に直撃した。

鳴神は悲鳴を上げながら地面に倒れ込むスキルアウト達を見ていることすらせず、体を電気変換して路地裏から立ち去った。

八月十日

PM04:32

とあるホテルにて

ああん？なに言ってるんだお前ら。俺達『サークル』が何をするかなんて決まってるんだろおが。

ああ、そうだ。暗部組織『リバーズ』だったっけか？あの組織の中でアレイスターの言うこと聞かねえ奴を殺すんだよ。

はあ？なんで『リバーズ』なんだって？

そりゃ、アレイスターの『プラン』に影響するやつらが集まってる組織だからなあ。そんな奴等がアレイスターの『プラン』を邪魔したら大変なことになっちまうだろおが。

しかし、この鳴神響輝って奴は面白え。こいつの能力と俺の能力、どっちが強いか一回手合わせ願いたいなあ。

あん？俺が怖いって？何言ってるんだ、これから面白えことになっていくんじゃないか。

さて、シヨータイムの始まりだ、鳴神響輝イ！！！！

行間〈平行線の主人公のような〉（後書き）

えーっと、今回は視点を工夫してみました。

最後に出てきたキャラが誰かはそのうちわかります。

というか、色々ありまして前回の後書きで予告した、日常パートとオリキャラ出しを取り止めた上、ヒロインを出すとか言ってたぐせに出してないのです。

すみません。

詳しくは活動報告にて。

番外編へ聖なる夜の迷い子達 (前書き)

番外編です

番外編〈聖なる夜の迷い子達〉

今日は12月25日である。

イエス・キリストの生まれた日
る。

つまりはクリスマスであ

ついでに言えば、今日の学園都市には雪が降っている訳で、いわゆるホワイトクリスマスというやつだ。

そんな日に鳴神響輝はカップル達で埋め尽くされたショッピングモールにいた。

さすがに鳴神は一人で来た訳ではない。阿澄に無理矢理連れて来られたのだ。

なのに鳴神は現在進行形で一人だ。

阿澄が『空いてる店探してくるね』とか言って離れていったきり、行方不明なのだ。

鳴神からしてみれば、探すのも面倒臭い、動くのも面倒臭い訳である。

これだけ人がいれば能力を使って探す訳にもいかず、取り敢えず右手を挙げておくことにした。

三十分が経った。

阿澄は全く戻ってこない。

鳴神としてもこのまま戻って来てくれなくては、これから鳴神の世話をする人が居なくなってしまうため、命取りとなる。

「仕方ねえ、探すか……」

鳴神はずっと真上に挙げていたためパンパンの右腕を反対の手で揉み解しながらカップル達を掻き分けていった。

居ない。全然居ない。

困ったものだ。この辺りは全て探し尽くしてしまった。なのに見つからない。

「……………」

鳴神も面倒臭くなってしまった。

もう夜の九時四十五分をまわってしまっている。このショッピングモールでのクリスマスイベントは十時までしか行われていないのであと十五分もない。

「くそっ！」

少し駆け足になりながら阿澄を探し続ける鳴神。

その視界にふとしゃがんだ少女の姿が入ってきた。阿澄だ。鳴神は阿澄に駆け寄っていく。

「おい、泉！」

壁際にしゃがみ込んでいる阿澄は、声をかけても顔を上げようとしていない。どうやら泣いているようだ。空から真っ白な雪が降ってくる。

「うう…せつかく…ひぐつ…響輝と…ぐすつ…来たのに…
…」
そんなことを阿澄が呟いた。泣きながらではあるが、確かに言った。その台詞を聞いた鳴神の思考より前に身体が動いた。阿澄の右手を握って立ち上がらせる。

「ふえっ!?!」

突然の事だったので阿澄はすっとんきょうな声を上げる。
しかし、鳴神はそんなことは全く気にせず人混みを掻き分けて進んでいく。

「ちよ、どこいくの!?!」

驚きながら質問してくる阿澄の頬はほんのり赤くなっている。

「黙って付いてこい」

鳴神は質問にも答えず阿澄の手をぎゅっと握り締めて進んでいく。
今度こそ離れ離れにならないように。

広場に出た。

現在PM9:59分48秒

クリスマスイベント終了まであと12秒。

「着いたぞ」

鳴神は阿澄に声をかける。

阿澄はぼーっと広場の中央に佇む大木を見つめている。

「……………きれい」

この広場に着いて初めての言葉がそれだった。

大木　　クリスマスツリーは様々な飾りや電飾、おまけに七夕

でもないのに短冊が飾ってある。

あと3秒。

阿澄が鳴神の方を向く。

あと2秒。

阿澄がそつと鳴神に抱き付いた。
突然のことに驚く鳴神。

あと1秒。

二人はそのまま待つ。

クリスマスツリーの明かりが一斉に消えた。クリスマスイベントが終了したのだ。

「あのさ……」

先に口を開いたのは阿澄。

「なんだよ……」

幼馴染みに抱き付かれたところで恥ずかしくもなんともないのだから、いつも通りの口調で返事をする鳴神。

阿澄がしつとりと濡れたピンクの唇を動かす。

「今日は……付き合ってくれてありがとう……」

まさか阿澄がそんなことを言うとは思っていなかった鳴神は意外そ

うな顔をした。

「別にいいが、次は迷子になるなよ？」
阿澄がくすつと笑った。鳴神は冗談で言ったつもりは無いのだが。

ふと、鳴神は思った。

来年も大変そうだ

と

番外編〈聖なる夜の迷い子達〉（後書き）

あんまりこういうの向いてない。

#3 - 1 最強の定義は絶対の強さ (前書き)

話し方が！

3 - 1 〈最強の定義は絶対の強さ〉

八月十九日

鳴神は例の如く、アレイスターからの依頼をこなすために行動していた。

しかし鳴神はあまり乗り気ではない。

その依頼が滅茶苦茶で、到底達成できそうもないものだからだ。

「つたく、『最強』に挑めなんて無理だろ」

『最強』
つまり今回の依頼は『学園都市最強である一方通行アクセラレに挑め』というものである。

今回は特に細かい規制は無かった。恐らく、アレイスターも鳴神が一方通行に勝てるとは思っていないのだろう。もちろん鳴神自身もそんなこと思っていない。

あんな『化け物』に勝てる人間がいるはずがないのだから。

しかし鳴神は行くしかない。自分の動きがアレイスターの『プラン』にどれだけの影響を及ぼすのかは知らないが、あまり派手な行動をすると殺されるだろう。

鳴神は電話の女に指定された場所へ向かった

白い少年がいた。

彼はこの街で一番強いと言われている。

けどただ最強なだけじゃ意味がない。

少年が目指すのはその先の無敵。

少年が目指すのは世界で一番強いという称号。

少年は今もその『無敵』を目指して人を殺し続けている。

でももうそれにも飽きてきた。

ずっと同じ人間を殺し続けているのだ、普通の人なら既に発狂していてもおかしくないような事をしているにも関わらず。

少年は感じ始めていた。

『無敵になんてならなくていいんじゃないか』と。

第七学区の誰もいない路地裏

鳴神は電話の女が指定した場所に到着していた。

しかしそこには先客が一人いる。

髪も肌も真っ白な少年。

彼が一方通行。

学園都市の七人の超能力者の一人にして最強の座に君臨する少年だ。

「アン？なんなんだ、テメエは？」

一方通行が鳴神に声をかけてくる　　というより邪魔なゴミが目

についた、という程度にしか思っていないのだろう。

「ああ、俺は鳴神響輝ってんだが……。なあ最強」
自己紹介を済ませ、何かを言おうとする。

「鳴神響輝ねエ……。俺になんか用かア？」
一方通行は、鳴神が自分のことを知っている為に『最強』と呼んだのだと予想したらしく、自分の自己紹介はしなかった。

「俺と戦わないか？」

あっさり言った。

鳴神からしてみればただアレイスターの依頼を遂行しているだけなのだが、一方通行は自分への挑戦と受け取ったようだ。

「……。へエ。オマエ、面白エな」

一方通行の、真っ赤な瞳が鳴神を睨み付ける。

一方通行の真っ白な髪が風でなびく。

「さっさと来いよ三下ア！！」

一方通行の『最強』はあくまで『最強』。戦ってみて初めてわかる強さなのだ。

つまり、鳴神のしていることは「試しに学園都市最強にケンカを売ってみよう」ということ。

「誰が三下だよ……。これでも自称大能力者だぞ？」
やれやれ、といったふうに戻事を返す鳴神。

「調子に乗ってんじゃねエぞ三下ア！！」
その言葉を挑発と捉えたのか、一方通行が動いた。

足元に転がっている小石を軽く爪先で蹴る。直後に小石は鳴神の目の前まで飛んできていた。鳴神はとっさに首を捻って避けたものの、一方通行のベクトル制御能力の凄さに驚かされる。

「へえ……。さすが、学園都市最強だな……」
どこにでもあるような小石を使った、たった一発の攻撃に対しての関心が思わず口に出てしまう。

「少しはやるみてエだなア　　！！」
一方通行はそんな台詞を叫びつつ脚力のベクトルを操作して鳴神に突撃してくる。

しかし、鳴神もその程度の攻撃を食らう筈もなく、身体を電気に変換して回避する。
攻撃をかわした後はすぐに一方通行から十メートル程のところまで身体を元に戻した。

「へエ、空間移動かア？」
テレポート

「さあな。それは戦ってたらわかるんじゃないのか？」
的外れな質問をする一方通行だが、どうやら鳴神の『身体を電気に変換することが出来る』能力を空間移動と勘違いしたようだ。
当然だが、鳴神は自らの手の内を見せびらかすようなことはせず、適当な返事を返す。

「まアイイか、どオセ死ぬんだからなア！！」
一方通行は叫びながらアスファルトの地面に爪先を突き刺した。更に、浮き上がったアスファルトの破片を蹴りつけ、鳴神に向かってショットガンのように飛ばす。
ここまで約1、5秒。もちろん、ベクトル操作をおこなっている一

方通行の脚は無傷である。

しかしいくら攻撃の『量』が増えようが『質』が変わらなければ鳴神に対しては意味がない。

鳴神は身体を電気に変換して攻撃を回避し、アスファルトの破片が地面に落ちたのを合図に、全く同じ場所に姿を現した。

「空間移動じゃねエなア、オマエの能力……。やっぱり面白エわ、オマエ」

攻撃が全く当たっていないにも関わらず、一方通行は普通の人間ならまずしないであろう戦闘を楽しむような笑みを浮かべる。

「そろそろこつちからも攻めないとな、面倒だ……」

鳴神は呟き、今まではジーンズのポケットに突っ込んでいた右手を一方通行の方へと突き出す。

そんな事をしている鳴神だが、反撃したところで一方通行に対しては何の意味も持たない事ぐらいは知っている。

完全にやる気のない鳴神は突き出した右手から蒼い雷撃を飛ばす。

もちろん、ベクトル操作が可能な一方通行にただの電撃が通じる筈もなく、鳴神の攻撃は反射され真っ直ぐに鳴神の方へ向かってくる。しかし、その電撃はあくまで鳴神が放つたもの。『雷光共鳴』ライトニングがそんな攻撃を食らうことなどあり得ない。

鳴神が右手をかざすと、電撃は空中で突然消えた。

「オマエの能力、面白エなア。多重能力者かなンか？」デュアルスキル

一連の動きを視ていた一方通行が不思議そうに鳴神に対して質問をしてくる。

「んな訳ねえだろ。ただの自称大能力者だよ」

完全にやる気を喪失している鳴神は返事も適当だ。

「大能力者ねエ……。ンなもんじゃあ俺には勝てねエぞ三下ア!!!」
戦いを楽しむ学園都市最強。
脱力し切った雷光共鳴。

「ちょっと響輝、なにやってんの？」
路地裏にもう一人の声が響いた

#3 - 1 《最強の定義は絶対の強さ》 (後書き)

一方通行戦です。

話し方がヤバいです。

指摘お願いします。

#3 - 2 《吹き荒れる電子の嵐は》（前書き）

えーっと、段々、物語が逸れてきております。
ご了承ください。

3 - 2 《吹き荒れる電子の嵐は》

「ちよつと響輝、なにやってんの？」

誰かの声が、鳴神響輝と一方通行しかいない筈の路地裏に響いた。その場にいた二人は反射的に声のした方向に顔を向ける。

二人の視界に入ってきたのは阿澄泉だった。鳴神の幼馴染みであり、家事などを全くしない鳴神の世話をしている女の子。

その阿澄がなぜこの場に居るのかはわからない。しかし、この場においては彼女は鳴神と一方通行の戦いに巻き込まれてしまう。

「どオやら鳴神クンのオトモダチらしいなア？」

先に口を開いたのは一方通行だった。阿澄にはなく鳴神に対して話しかけてくる。

阿澄が鳴神の知り合いとわかったのは阿澄が来たことに鳴神が驚いて対応が遅れたためだろう。

「チツ！おい泉、今すぐここから離れる！」

一方通行に言われた焦って阿澄に指示を出す。

「えっ？どういうこと？その人は誰なの？」

しかしそこはお節介な阿澄だ。鳴神の言うことを聞かずにどんどん危険な領域へ踏み込んでくる。

「鳴神クンのオトモダチならちゃんともてなさねエとなア、鳴神クンよオ？」

阿澄が引き返さないことで一方通行の標的が鳴神から阿澄に移った。鳴神に対しての語りかけではあるが、既に一方通行の眼には阿澄しか写っていない。

「ギャハハハハ！面白エ！どオやらこいつを殺せばもつと楽しめオだなア！」

狂ったように一方通行は笑い、叫ぶ。

次の瞬間、ガストゥ！という鈍い音が聞こえたかと思うと阿澄が頭から血を流して倒れた。

一瞬の出来事だった。

ただ一方通行が足元に落ちていた石ころを爪先で軽く小突いただけ。その勢いをベクトル操作により阿澄の頭に向けたただけの話。

「泉？おい！泉！」

鳴神は叫ぶ。阿澄から返事は返ってこない。

白い少年は笑っている。

まるで、初めて玩具を与えられた子供のような笑み。

少年は鳴神をただ自分を楽しませる為だけの玩具としてしか見ていない。学園都市最強に勝てる者などいない。自分以外の人間は自分を楽しませる為だけに生まれてきたただの『人形』。

一方通行の赤い瞳が鳴神響輝という『人形』に向けられたその瞬間、
「オオオオオアアアオオオオオ！！！！！」

鳴神が吼えた。

ズバアツ！と、彼の身体を中心に真つ白な閃光が嵐のように吹き荒れた。

まるで第四位の『原子崩し（メルトダウン）』。電子を『粒子』と『波形』のどちらでもなく、曖昧な状態で無理矢理操る能力だ。

今の鳴神の放っている白い光の筋はそれと全く同じもの。
つまり、鳴神は『原子崩し』を使っているのだ。

能力の暴走。

鳴神響輝という人間が能力に飲み込まれた瞬間だった。

「ヒヤハハハハ！！そオだよ、それだよそれエ！！もっと楽しませるよオ、三下ア！！！」

一方通行はその嵐の中心に向かって躊躇せずに進んでくる。彼に触れる全ての光の筋はベクトル操作により嵐の中心へと返される。だがそれも途中で別の閃光に当たり、消える。

しかし、全ての攻撃が阿澄に当たることはない。その現象が起きたことによつて、意識のない筈の鳴神はそこまで計算し尽くした上で攻撃をしているのだと初めてわかる。

突然、光の嵐が止んだ。

「アクセラレエエタアアア！！！！！」

鳴神が一方通行に向かって吼える。その叫び声を聞いた一方通行を激しい頭痛が襲った。

「がッ！？アアアアア！？」

鳴神が生体電気を操作したのだ。しかし一方通行は学園都市最強だけあつて、直ぐに自身の生体電気のベクトルを操作して体勢を立て直す。しかし鳴神の生体電気操作を食い止めるだけで限界。他のことに気を取られるとまた頭痛が襲ってくるだろう。言ってみれば高度なハッキングのし合い。

鳴神が攻めて一方通行が守る。隙を見せれば自分が殺られる。ただのハッキングとの違いはただそれだけ。

言うなれば鳴神は最強の矛、一方通行は最強の盾。

互いに最強である存在はどちらかの存在が消えるまで矛盾している。

「オオオオオオオオ！！！！！」

「アアアアアアアア！！！！！」

雷光共鳴と一方通行が叫ぶ。

二人ともが己の全力を尽くして戦っている。

鳴神はアレイスターの依頼など既に関係なく、阿澄の為に。

一方通行は今までとは違い、純粹にこの戦いを楽しんでいる。

延々と戦いは続く。

鳴神は一方通行と同等、もしくはそれ以上の力を使って戦っている。

「このままじゃ雷光共鳴が勝っちまいそうだなあ」

男の声がした。

鳴神と一方通行の演算が止まる。

声の主は突然彼らの視界に現れた。

男はライトブラウンの短髪でどこにいても注目されるような端正な顔立ち。服装もファッションモデルなのではないかと勘違いしてしまう程センスがいい。

しかし、その男の両腕には二人の女の腕が絡められていた。一人は大和撫子という言葉がよく似合う気品に満ちた雰囲気的女性。もう一人は少々小さいが、無垢な笑顔を浮かべた活発そうな少女。二人とも、思わず息を飲んでしまう程の美人だ。

「なんなんだテメエ等はアアアアア!!!」

先に声を出したのは一方通行だった。二人とも、この男達に心当たりは全くない。

「北皇帝ほくおうみかどってんだ。よろしく頼むわ、一方通行と鳴神響輝君よお」

男 北皇帝は簡単に自分の素性をばらしてきた。

「立花未知たちばな みさとと申します。以後お見知りおきを」

「時雨晴妃しめはひだよ！よろしくね！」
二人の女もそれに続いて鳴神達に自己紹介をしてくる。

「んで、お前は何で俺の名前を知ってるんだ？」

ようやく自我を保つことができた鳴神はもつともな質問をする。確かに、学園都市第一位の一方通行を知っているのはおかしいことではないが、ただの能力者である鳴神のことを知っているのはおかしい話だ。

「はあ？んなことかよ。そりゃ、俺達が暗部組織『サークル』だからだ」

暗部組織。

北皇は確かに暗部組織と言った。

鳴神の所属している『リバーズ』とはまた別の暗部組織。

「補足説明をしておきますと、『サークル』はあなた方『リバーズ』がアレイスターの指示通りに動かなかつた際、それを制御する役割を持っています」

これは立花の言葉だった。

「サンキュー、ミサト。つまり、俺達『サークル』は、お前を殺そおが何をしようがアレイスターの思惑通りに事が運べば問題ねえんだよ」

北皇は少し癖のある口調で語った。

その台詞を聞いた一方通行が苛ついたように言い返した。

「だからどオしたってんだア？邪魔すんな、俺がコイツを殺すんだよ！ー！」

やれやれ、と言いながら北皇は一方通行を指差して言う。

「今のお前じゃ勝てねえよ。殺してえなら絶対能力者（レベル6）
になってからだなあ」

絶対能力者 学園都市には超能力者（レベル5）までしか能
力のランクはない。

恐らく、超能力者でもこの強さなのだから絶対能力者になった学園
都市第一位である一方通行が更に強く、誰にも勝てないような存在
になるのだろう。

「オマエ等が言いてエのは俺にこの計画プランを続けて欲しいってコトな
んだな？面白エ、なってやるオじゃねエか！！絶対能力者によオ！
！」

一方通行は心の底から楽しそうな笑みを浮かべる。

そう、絶対能力者になれば何かが変わるのかも知れないのだ。『最
強』の先にある『無敵』になれば何かが変わるのかも知れない。

「わー、一方通行がやる気になったー！」

全く空気を読まない時雨がはしゃいでいる。うるせえ、と北皇が頭
を小突いた。

「面白かったぜエ、鳴神クンよオ。次アオマエは絶対能力者に初め
て殺られちまう人間だア！！」

一方通行は去っていく。

恐らく、次に鳴神の前に現れる時には絶対能力者になっているのだ
ろう。

「んで、北皇、だっけ？俺はどうするんだ？」

鳴神は一方通行の後ろ姿を見ながら聞く。

「ああ、お前の処分は先送りだなあ。また会おうぜ、雷光共鳴」

「それではまた会いましょう」

「ばーいばーい！」

そう言っつて北皇達も路地裏から立ち去っていく。

「『サークル』ねえ……」

そう呟きつつ、意識のない阿澄のもとへ向かう鳴神。その顔は何だか楽しそうだ。

鳴神は地面に座り込み、阿澄の顔を見る。そしてこう呟いた

「常識を教えてやる、『サークル』」

「

八月二十三日

鳴神の耳に信じられない情報が入ってきた。

『学園都市第一位がただの無能力者（レベル0）に負けた』

鳴神があれだけ苦戦し、途中で記憶が途絶えているのだが
局、勝てなかつた一方通行にただの無能力者が勝った。
電話の女から聞いた話だ、確実な情報なのだろう。

結

一方通行は絶対能力者にはなれない。

それが最終的な結論だろう。

無能力者に負けるような超能力者が更にその上の絶対能力者になれる筈がない。

鳴神は阿澄の入院している病院にいる。

打ち所が悪くなかったのか、命に別状は無いそうだが二週間の入院らしい。

これが暗部になった代償だというのなら鳴神は学園都市を敵にまわしてでも今までの日常を取り戻す。

アレイスターの『プラン』を潰す。

それが鳴神がこれからしなければならぬこと。

その行動が『プラン』を更に進めてしまおうが、鳴神は自分の大切なものを守ればそれでいい。

鳴神は『冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）』と呼ばれる医者が居る病院で考える。

彼のこの考えが世界に大きな影響を与えることも知らずに

#3・2へ吹き荒れる電子の嵐は〈（後書き）

はあ、一方通行が難しいぜ……。

さて、それは置いて、いかがだったでしょうか？

一方通行の心境は勝手に作らせて貰いましたが、一応筋は通ると思
います。

感想や意見お待ちしております。

もう一度、雷光共鳴と一方通行が交差するのはいつの日か

4 - 1 《天使降臨のエンゼルフォール》（前書き）

遅くなりましたが、御使墮し編開始です。

4 - 1 《天使降臨のエンゼルフォール》

ここに鳴神響輝という青年がいる。
いや、『いた』と言った方が適切だろうか。

八月二十八日

学園都市第七学区の窓のないビルの中に『鳴神響輝であったものは存在した。』
別に血まみれの肉塊や人肉の破片が飛び散っている訳ではない。ただ何も無い空間で青白い火花が散っているだけ。

突然、火花が消えたかと思うとその場に『青年』が現れた。
彼が鳴神響輝。

雷光共鳴という能力を使用し、人間ではない『電気』としてそこに存在していたのだ。
彼が見つめる先にあるものは、『人間』
それ以外に形容のしようのない生き物。

それが学園都市統括理事長、アレクスター・クロウリー。
鳴神が暗部組織『リバーズ』に入ったのもアレクスターの意思によるものだ。

「急に呼び出して電気になっとけって何か理由があるのか？」
鳴神は、左手はポケットに突っ込み、右手で首筋を揉みながら聞く。

「『御使墮し（エンゼルフォール）』だ。ふむ、やはり私や電気であつたお前は例外のようだな」

「エンゼルフォール？もしかして魔術ってやつか？」

鳴神は、『御使墮し』という単語がどういふものなのかを考え、そういう質問をした。

今までにも、神裂火織、ステイル、マグヌス、アウレオルス、イザード、といった魔術師達と戦ってきた鳴神には、魔術がどういったものかは大体わかってきた。

おそらく、アレイスターの言う『御使墮し』とは魔術の類いだろう。

「そうだ。正確には『御使墮し』と呼ばれることになる大規模魔術だ。簡単に言えば、『天使』を『人間』に落とす魔術だな」

「天使？そんなものいねえだろ」

『人間』アレイスターは『天使』という単語を持ち出した。

鳴神は魔術という『異能』を目の当たりにしたとはいえ、科学の街、学園都市の人間だ。天使や神様なんて信じてはいない。

「魔術では天使の力は存在する。莫大な天使の力を人間の位まで落とす魔術。それが『御使墮し』だ」

鳴神はアレイスターの説明に首を傾げる。

「なら、俺が電気になる必要はないだろ？」

確かに、『天使』を落とすだけの魔術なら鳴神が電気にならなくても影響はないはずだ。

「本質はな。だが、天使を無理矢理人間に落とすということは、空いた天使の『枠』に人間が上がることになる。その副作用として、この世界に存在する人間の『外見』と『内面』が入れ替わる訳だ」
鳴神は、人の『外見』と『内面』が入れ替わるなんて話は本やアニ

メ（くうそうのせかい）でしか見たことがない。現実で起きるなんてそれこそ寝ぼけているのかと思ってしまう。

「だったら、入れ替わった影響で混乱は起きないのか？」

「問題ない。この魔術の影響下にある人間は、『外見』が入れ替わった人間が『内面』の人間と認識するからな」

本当に不思議な話だ。

現在進行形で発生している魔術、『御使墮し』は天使を人間に落とす副作用として、人間の『外見』と『内面』を入れ替え、影響下にある人間にはそれが観測できないらしい。

しかもアレイスターは『呼ばれることになる』と言っていた。アレイスターの言うことを信じれば、まだ他の場所ではこの魔術について詳しくわかっていないらしい。なので、科学の総本山、学園都市のトップに君臨する人間が『御使墮し』と呼ばれることになるらしい魔術について詳しく話しているのはおかしいことなのだ。

とにかく、今は気にするべき事ではないと判断した鳴神はアレイスターへの質問を続ける。

「『影響下にある人間』ってことは、それ以外の人間の俺達はどうなるんだ？」

「私達のような例外からの『御使墮し』の観測は可能だ。つまり私達から見たとき、他の全ての人間は『外見』と『内面』が入れ替わっていることになる」

鳴神は、アレイスターの返答にうんざりしながら呟く。

「また面倒な話だな……。俺は『御使墮し』が終わるまで中身が誰

なのか推理しながら過ごさなくちゃならないのか……」

ここに来て、初めてアレイスターの表情が変わった。
今まではずっと無表情だったが、鳴神の台詞を聞いて少し驚いたよ
うな顔になっている。

「何を言っている？お前は計画プランの進行役だ。『御使墮し』発動中に
計画プランの軸軸にいる『幻想殺し』に関係の無い者が接触しないように
するのが今回の任務となる」

「幻想殺し？」

聞き慣れない単語が鳴神の耳に入ってきた。

また魔術か何かの類いだろうか。少なくとも、学園都市で作られた
能力では無いことは確かだ。

「気にするな。今のお前が知るべき事ではない」

アレイスターが何を隠したいのかは分からないが、『幻想殺し』と
いう単語は計画の軸軸プランにいるらしい。つまり、『幻想殺し』とやら
を潰してしまえば計画は計画プランとして機能しなくなる。

「まあいいか……。んで俺は何をしたらいいんだ？」

『雷光共鳴』は、必ず『幻想殺し』と交差する

アレイスターは不必要なことは言わず、ただ計画プランの進行に必要な仕
事を『雷光共鳴』に任せる。

「ふむ、まずは魔術師とでも戦ってもらおうか」

4 - 1 《天使降臨のエンゼルフォール》（後書き）

説明文ばっかですねw

まあ、次回から戦闘シーンが始まるかもってことで。

伏線も堂々と張るとききました。

4 - 2 《絶対零度のアイスプリズン》（前書き）

書き方変えてみました。

違和感があったら指摘して下さい。

4 - 2 へ絶対零度のアイスプリズン

鳴神響輝は学園都市の外にいた。外、と言っても北海道や沖縄のようないかにも旅行という感じのする場所ではない。群馬県の寂れた山荘に一人で向かっているのだ。

「はあ、なんでまた面倒なことを……」

アレイスターからの依頼、計画を進行させるためとはいえ、わざわざ『外』に出向く必要はないだろう、と鳴神は思う。電気になつて群馬県まで行けば早いのだが、ここは学園都市の『外』だ。そんなところで能力を使う訳にもいかず、電車で揺られながら流れて行く景色を眺めていた。

突然、電車が減速を始めた。どうやら次の駅に着いたらしい。寂れた町に向かう電車なだけあって、乗客も殆どいない。

「おっと、すみません」

茶色の短髪をした、眠たげな目の青年が持った大きなポストンバツクが鳴神の脚にぶつかった。

乗客は満員電車とは程遠い、というより、この車両には鳴神とその青年しかいない。そのような状況でカバンを他人にぶつける筈がない。

「ああ、構いませんよ」

気にはなつたが、追求するようなことではないだろうと思ひ、適当な返事を返す。

「突然だけど君、俺がどんな風に見える？」

本当に突然の質問だった。

ここで鳴神が疑問を抱いて、『御使墮し』発動中であることを警戒していればよかった。

「どんな風って、茶髪の歳上ですけど」

しかし、鳴神は『御使墮し』発動中であることを考えずに答えをしまう。

青年は残念そうな顔をする。

「そうか……。そう見えるなら、君が『御使墮し』の術者だな」

その言葉の直後だった。

鳴神がそれについて思考する暇もなく、青年の背後から何かを襲いかかってきた。鳴神は反射的に演算式を組み立て、雷撃でそれを迎撃する。

バチイ、と鳴神の放った高圧電流は襲いかかってきた何かは弾け飛んだ。そこを中心に、まるで水風船を割ったかのように水が辺りに拡散する。鳴神も勿論その被害を受けて、多少服を濡らす。

そこにきてようやく鳴神の思考が身体の動きに追い付いた。

青年は水を操っていた。学園都市の『中』であれば水流操作系の能力だとわかる。しかし、ここは学園都市の『外』。そんなところに能力者がいるはずはない。それだけではなく、青年は『御使墮し』という単語を知っていた。

つまりは 『魔術師』。

「常識知らずだな、テメエ」

すつと立ち上がり、その鷹のような目で魔術師の青年を睨み付ける。

しかし、青年は全く怖じ気づく様子を見せない。その姿からは青年の自信がうかがえる。

『その程度、怖くもなんともないんだよ』と。

「常識は結構知っているつもりだけどなあ？ まあ、簡単な自己紹介させてもらおうかな」

足を動かさずに床を滑るかのようにして鳴神から距離をとっていき、水を操っていた事から察するに、床に薄い水の膜を張って摩擦を軽減させているのだろう。

「俺は水沢零度。みずさわ れいど 『必要悪の教会』ネセサリウス 所属の魔術師さ」

『必要悪の教会』

以前に戦った神裂火織が所属していると言っていた組織の名前。恐らく、あのステイル^{II}マグヌスも所属しているのだろう。

水沢は更に言葉を続ける。

「ちなみに、魔法名は『Freezing010』。そうだなあ…
…意味は、消え行く温もりに最後の涙を、ってとこかな」

魔術師 水沢零度は今までの魔術師とは違った。

アウレオルス^{II}イザードや、ステイル^{II}マグヌスのようにおかしな格好をしている訳ではなく、どちらかと言えば神裂火織に近い服装だ。

しかし、神裂とも違う。

神裂は、『常識の範囲内でおかしな格好』だった。それと比べて、水沢は『どこにでもいるような青年』そのもの。それ以外に形容しようのない外見だ。半袖の青いTシャツにどこにもあるようなジーンズという服装をしている。

「へえ。ところで、何で俺が『御使墮し』の影響下にいないってわかったんだ？」

そんな質問を鳴神はした。

魔術師であるうが、影響下にいない人間であるうが、初対面の鳴

神が影響下にいないとわかる筈がないからだ。

「俺は『半分』、影響下から外れてるんだよ」

一瞬、返答の意味がわからなかった。

だが、水沢は『御使墮し』を観測出来ている。鳴神が例外であることを知った決め手が、『自らの外見』のようだった。つまり、水沢は『本来の自らの容姿と現在の容姿が違うことを知っている』。それなら辻褃があう。

鳴神は、水沢の元々の容姿を視ている。だが、『御使墮し』の影響下にある人間から視れば別人に見える筈だ。それで先程の質問で鳴神が影響下にいないとわかったのだろう。

以上の思考を一秒も掛からずに終わらせたところは、さすが学園都市の能力者だと言える。

「お前は『外見』だけが違う……。そう言うことか？」

それが鳴神の最終的な答えだった。どこかのウニ頭では説明を聞いても到底理解出来ないようなことを元に、自らの頭脳のみで予測し導き出した。

「そうだよ。『御使墮し』が発動したときに俺はウィンザー城にいたからね。影響下にいる人間からは金髪のイギリス人に見えるんだよ」

水沢は喋り終わると大きな欠伸をした。

「金髪外人ねえ……。まあいい。それより、俺とやるんだろ？」

鳴神はこの水沢との会話がつまらなさそうに言う。

「そうだね。じゃ、始めようか」

その言葉と同時に、重そうなポストンバックから何かを取り出す。

水の入った500mlのペットボトルだった。水沢はその蓋を開け、中に入っていた水を電車の床にぶちまける。水沢は、びしょびしょに濡れた床の中心に立っている。

「水よ、万物を斬る刃となりて」

水沢が意味ありげな台詞を言った直後、床にぶちまかれた水が空中に浮かび、幾つものナイフとなった。

ステイルとの戦闘を経験している鳴神には、その台詞が魔術の詠唱だと容易に予想がつく。右手を水沢に向ける。

「敵を討て！」

水沢のその言葉とともに水のナイフが鳴神に切っ先を向けて射出された。鳴神との距離は十メートル。その速度は恐らく、音速に少し劣る程度。

「つまらねえ」

一瞬だった。

鳴神の挙げていた右手から無数の蒼い光が放たれ、水のナイフを打ち砕いた。さらに、電撃の熱で水を蒸発させる。

「な……」

初撃を難なく防御されたためか、水沢は驚きを隠せない。

「つまらねえな」

その言葉は、水沢に向けたものではない。

学園都市統括理事長、アレキスター。

鳴神のその台詞は、目の前にいる水沢零度という人間ではなく、アレキスター「クロウリー」という人間に向けたものだった。

「テメエの計画プランがどんなものだろうが知ったこつちやないけどよ
」

鳴神の眼は確かに水沢に向けられてはいるが、やはり、水沢を見てはいない。

鳴神は続ける。その眼に稲妻のような光を宿して。

「こつちから先は、俺の好きにさせてもらつてぞ」

#4 - 2 へ絶対零度のアイスプリズン (後書き)

今回から書き方を変えてみましたが如何だったでしょうか？

連載初期よりは次の文が増えてきたかと思えますのでそろそろ改稿も始めようと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6674y/>

とある科学の雷光共鳴

2012年1月10日00時47分発行